



パテック フィリップ ジュネーブ

2021年11月

20周年を迎えたパテック フィリップ・ミュージアム

2001年11月に開館したジュネーブのパテック フィリップ・ミュージアムは、世界で最も重要かつprestige溢れるタイムピース・コレクションのひとつである。約2,500点におよぶタイムピース、オートマトン（自動人形）、希少なオブジェ、七宝細密画を展示し、ジュネーブ、スイス、ヨーロッパの500年におよぶ時計製作の歴史を一望にする。最近導入された新しいミュゼオロジー（博物館学）は、この体験を特に鮮やかに魅力的なものにしている。この国際的に著名なジュネーブのミュージアムは、専門家、愛好家、一般の人々に、時計製作とこれに関連する芸術が象徴する卓越した文化的遺産に対する、より深い知識を与えてくれる。

驚嘆すべき個人コレクション

パテック フィリップ・ミュージアムは、ある人物の時計製作への情熱から生まれた。その人物とは、当時ジュネーブのマニュファクチュール パテック フィリップ社長であり、現在は名誉会長であるフィリップ・スターン氏である。スターン氏は、ミュージアムの創設を考えるよりもずっと前から、コレクションの収集を始めていた。最初はパテック フィリップの時計、特に複雑なモデルに集中していた。1980年からは、16世紀に始まる時計製作史上重要なタイムピース、および伝統的にジュネーブが得意とする希少な七宝芸術にもコレクションの対象を広げていった。こうして今日、最も驚嘆すべき個人コレクションとされているタイムピース・コレクションが少しずつ形成されてきたのである。しかしスターン氏は、個人的な好みを満足させるためののみ、これらの技術上、芸術上の傑作を収集したのではなかった。氏の目的は、時計製作芸術への情熱と知識を広く一般の人々に知らせることであった。それによりジュネーブの偉大な高級時計製作の伝統を共有し、この文化遺産を後世に伝えたいと考えた。こうしてミュージアムの構想が具体化していったのである。

由緒ある様式を誇る建物

最高のコレクションには、最高の展示空間が必要とされる。パテック フィリップ・ミュージアムは、1919年から1920年にかけて建てられ、細心の配慮を注いで改修された壮麗な工業用建物に収められて世界の見学者を迎えることとなった。ジュネーブ・プランパレ地区、ヴィュー・グルナディエ通り7番にあるこの建物は、歴史的に時計師や関連する業種の職人たちにより使用されてきた。パテック フィリップは1975年にこの建物を購入し、ケース、ブレスレット、チェーンを製作する生産ラインとしてアトリエ・レユニS.A.を設立した。1996年、プラン・レ・ワットに新しいパテック フィリップ本社工場が完成したのに伴い、建物は不要となった。フィリップ・スターン氏は、自らのコレクションをここで一般公開することを決心した。1999～2001年の間に建物は全面的に改修され、建物の持つ歴史を最大限尊重しつつ、最上階に1フロアが増築された。内部装飾は、温かく、居心地のよいプライベートなサロンのような雰囲気を持った場所を実現したいと考える、フィリップ・スターン氏夫人ゲルディ・スターン女史により統括された。こうしてパテック フィリップ・ミュージアムは完成し、ついに2001年11月、技術的、芸術的、美的、歴史的、科学的価値にふさわしい展示空間を得て、コレクションが一般に公開されたのである。



500年にわたる時計製作の歴史

パテック フィリップ・ミュージアムは、ひとつのブランドに捧げられた博物館という枠組みをはるかに超え、5世紀にわたる時計製作、およびそれに関連する彫金、七宝、ジュエル・セッティング、ギョシェなどの伝統的装飾工芸技術の歴史を一望にできる、世界でも類を見ない展示空間である。パテック フィリップ・ミュージアムの作品展示は、2つの補完的な部門から構成されている。3階は、誕生（16世紀）から19世紀前半に至る、機械式携帯時計の歴史に捧げられた《オールド・コレクション》である。2階は、1839年の創業から2000年までにパテック フィリップが創作した最も重要なタイムピースを展示する《パテック フィリップ・コレクション》である。4階には、約8,000冊に及ぶ時計および関連分野の書籍を所蔵する図書館が設けられており、ミュージアムの教育的役割を強調している。

重要な見どころ

パテック フィリップ・ミュージアムは、過去20年の間に、ジュネーブの最も優れた博物館であると共に、文化的なハイライトのひとつとしての評価を確立した。世界中の見学者だけでなく、ジュネーブの文化遺産についての知識を求める近隣地域の人々も訪れている。20年間で60万人以上の来館者を記録したことがその成功を物語っている。常設展示に加え、特定の希少なオブジェを紹介する特別展も開催されている。2005年には《王室のタイムピース》、2010年には《魅惑の鏡：プレステージ溢れる中国向けペアウォッチ》、2012年には《ルソーの銘を帯びたタイムピース》展が開催された。一般向けガイド・ツアーは毎週土曜日にフランス語と英語で行われているが、事前に予約すれば7か国語（フランス語、英語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、中国語、ロシア語）のガイド・ツアーも可能である。また、テーマ別のツアーも行われている。テーマは、七宝、オートマトン（自動人形）の世界から、児童向けツアー、ウォッチメーカーの街ジュネーブの昔を発見するディスカバリー・ツアーまで多岐にわたる。これらも予約可能である。また、特別なアトラクションが用意された週末の公開日も忘れてはならない。また一部の所蔵品は、時計製作芸術に捧げられ、世界各地を巡って一般に公開される、《パテック フィリップ・ウォッチアート・グランド・エグジビション》において展示されている。

見学者に与える新たな体験

フィリップ・スターン氏と、2014年からミュージアム館長兼キュレーターを務めるピーター・フリス氏のリーダーシップの下、新たな作品の購入が行われ、コレクションは充実を続けている。またオールド・コレクション、パテック フィリップ・コレクションの2つのメイン・セクションのレイアウトが変更され、各々が時計の歴史やパテック フィリップの世界の特定の側面を反映した20のテーマ別エリアから構成されている。さまざまなガイド・ツアーに加え、タブレット端末を使用したオーディオガイドも導入された。このオーディオガイドは、展示品に関するあらゆる情報を提供すると同時に、時計製作と科学、ファッション、芸術運動、社会変化との間の密接な関係に焦点を当てつつ、これらが製作され、着用された背景を説明することを可能にしている。オーディオガイドは現在、英語、フランス語、ドイツ語による、延べ約20時間のガイドを提供している。2023年には他の言語にも対応する予定である。ユーザーは自身で順路を組むことも、フィリップ・スターン氏自身の提案によりあらかじめ設定された順路を選ぶこともできる。約10,000枚の写真で構成されたこのアプリケーションにより、ショーケースでは見えない細部や特徴を拡大して見ることができる。現代的で、インタラクティブで、ダ



《報道資料》 ページ 3

イナミックなこのアラカルトによる見学方法は、見学者の個別の興味に合わせて自由に利用できる。

参考書籍

パテック フィリップ・ミュージアムは、専門家やタイムピース愛好家のために2巻の総合カタログを作成した。パテック フィリップ・コレクションに関する第1巻は2013年に刊行され、オールド・コレクションに関する第2巻は2016年に出版された。後者は在庫切れのため、2023年に最近の購入品を含めた新版が刊行される予定である。

開館20周年を記念し、幅広い読者を対象とした100ページの新刊書が2冊刊行される。ひとつはオールド・コレクション、もうひとつはパテック フィリップ・コレクションを対象とする。2022年に英語で刊行され、それぞれ10,000部が発行される。2冊のセットはプレゼンテーション・ボックスに収められて販売されるが、それぞれを個別に購入することもできる。

パテック フィリップ・ミュージアム
ヴィュー・グルナディエ通り7番
1205ジュネーブ
Patek Philippe Museum
Rue des Vieux-Grenadiers 7
1205 Geneva
www.patekmuseum.com
www.patek.com/museum

開館時間

火曜日～金曜日：午後2時～午後6時

土曜日：午前10時～午後6時

閉館日：日曜日、月曜日、祝祭日





パテック フィリップ・ミュージアム

見学のしおり

パテック フィリップ・ミュージアムは次の4展示フロアに分かれており、見学は1階、4階、3階、2階の順序で行うよう設計されています。

1. 1階：作業ベンチと昔の機械・工具のコレクション、修復工房
2. 4階：パテック フィリップ歴史資料、図書館、七宝細密画による肖像画と嗅ぎたばこ入れのコレクション
3. 3階：16世紀から19世紀半ばに至るオールド・コレクション
4. 2階：1839年から2000年に至るパテック フィリップ・コレクション

1階

作業ベンチと昔の機械・工具のコレクション、修復工房

1階には、昔、時計師やジュエラーが使用していた作業ベンチが多数展示され、工房の雰囲気再現しています。18世紀から20世紀半ばに至る機械・工具のコレクションは、時計製作の各工程や、装飾に必要なさまざまな工程を示しています。

伝統的時計製作技術の証ともいべきこの展示エリアには、ジュネーブの《キャピノティエ》のアトリエを思わせるガラス張りの修復工房が併設されており、時計修復の専門家による修復作業の実演が行なわれています。デリケートな修復作業には、卓越した手先の器用さと、伝統的な技術・ノウハウの習熟が要求されます。また過去の時計師が製作した当時と同じ工具を用いることにより、多くの場合、同一の部品を再現することができます。

4階

パテック フィリップ歴史資料、図書館、七宝細密画による肖像画と嗅ぎたばこ入れのコレクション

4階は、パテック フィリップの歴史に捧げられています。マニュファクチュールの歴史における重要な出来事を跡づける歴史資料の一部が展示され、創業者アントワーヌ・ノルバール・ド・パテックとジャン・アドリアン・フィリップによる自筆の文書も含まれています。

またフィリップ・スターン氏の父であり、ティエリー・スターン現社長の祖父にあたる故アンリ・スターン氏の執務室を再現したコーナーが、ジュネーブ最後の独立した偉大な時計マニュファクチュール、パテック フィリップの家族的な性格をよく表しています。

4階には、時計製作とこれに関連するテーマを扱う特設図書館があり、七宝細密肖像画やその他の七宝細密画のコレクションも展示されています。16世紀から現代に至る約8,000冊の書籍の中には、ガリレオ（1564～1642年）や髭ぜんまいの発明者であるクリスチャン・ホイヘンス（1629～1695年）の著作など、貴重な文献が数多く含まれています。



《報道資料》 ページ 5

この図書館の中央には、壁面に4つのショーケースがあり、141点の希少な七宝細密肖像画が収められています。その中には巨匠の銘入りのものもあります。またテーブル・ショーケースには、同じ先祖代々の技術、真珠やギヨシェ・モチーフで装飾された、16点の嗅ぎたばこ入れが展示されています。18世紀から19世紀にかけて製作されたこれらの芸術と技術の賜物は、ジュネーブの誇る偉大な専門分野となり、この都市の国際的な名声に大きく貢献しました。

図書館には、これらの作品に加え、時計と天文学の分野における驚異的な作品がいくつかあり、その中には1810年頃にフランスのマスター・クロックメーカー、アンティード・ジャンヴィエが製作したテーブルクロックも含まれています。台座の上に古色を帯びた青銅製の3人の裸のアトラスが乗っており、彫刻を施したガラス製の天球を支え、その中には太陽の周りを回る惑星の動きを再現した太陽系儀を見ることができます。

3階

16世紀から19世紀半ばに至るオールド・コレクション

パテック フィリップ・ミュージアムの3階フロアでは、時計製作の初期を代表する希少な作品約1,200点を通じて、携帯時計とこれに関連する装飾工芸技術の歴史を一望することができます。オールド・コレクションの展示は、20のテーマ別エリア（添付のフロアプランを参照）に分れ、それぞれが時計製作における技術的・美的発展の特定の面に焦点を当てています。

展示は、16世紀初頭における最初の携帯用時計の出現から始まります。展示作品の中には、この種の時計としては最も古いもののひとつである、1530年頃に製作されたドイツ製のドラム型時計があり、所有者はこれをペンダントとして着用したと考えられます。1675年以前の時計はまだきわめて不正確で、何よりもプレステージを示すオブジェであり、富と洗練された雰囲気伝えるものでした。そのため、豪華な彫金、宝石、クロワゾネ七宝、シャンルヴェ七宝、独創的なケースの形状などの装飾的要素が重要視されました。ここでは、正方形、楕円形や球形の時計、さらには十字架や人の頭蓋骨（《汝死を心せよ》）、イルカをかたどったものなど、興味深い作品を展示しています。

また16世紀後半には、迫害を逃れたユグノー教徒（フランスのプロテスタント）の職人たちが多数亡命してきたため、ジュネーブの時計製作が急速に発展したことを知ることができます。

1630年頃には、時計のケースや文字盤を七宝細密画によって装飾した最初の例が、初めはフランスのブロワ地方で、その後は他のヨーロッパ諸国でも見られるようになりました。パテック フィリップ・ミュージアムでは、色彩の鮮やかさで知られるこれらの卓越した作品の数々を展示しています。宗教的、神話的な場面を描いたこれらの作品は、多くヨーロッパ絵画の巨匠たちの作品からインスピレーションを得ています。この時代を代表するミュージアムの宝物のひとつである《神学的美徳》と題されたフランス製のペンダント・ウォッチは、シャンルヴェ七宝、カマイユ（単色画）、ダイヤモンドで装飾されたケースが目玉に値します（Inv. S-1054）。またジュネーブの職人たちも七宝細密画の技術を採用するようになり、その結果、比類ない輝きと精巧さに到達しました。



《報道資料》 ページ 6

1675年、オランダの物理学者クリスチャン・ホイヘンスが髪ぜんまいを発明し、時計製作における新しい時代が始まりました。時計はそれまで主に見せるために着用されていましたが、今や日差1～2分以内の精度を持つ精密機器となったのです。この技術的な飛躍は他の科学的な発見を促し、時計製作の進歩に貢献しました。パテック フィリップ・ミュージアムは、コンプリケーションと精度という2つの目的を持つ洗練されたタイムピースの卓越したコレクションにより、この科学的な時計製作の進歩を跡づけています。

啓蒙時代は、美的な創造性にあふれた時代でもありました。婦人用時計はジュエリーのように洗練され、繊細なペンダント、またはファッショナブルなシャトレーヌ・ウォッチ（腰鎖付時計）として着用されました。文字盤のバリエーションも豊富となり、中には独自性溢れるものもありました。ジュネーブの著名な《ファブリック》は、時計や宝飾品を作る工房の総称であり、その製品の品質は世界的に有名でした。とりわけ七宝細密画による装飾で知られ、著名なジュネーブの《フォンダン》(透明釉薬) は作品に比類ない輝きを与えました。

輸出向けの作品の中で特筆すべきは、中国市場向けの時計です。これらの作品は通常、2個1組で製作され、時には各々のケースに同一のモチーフを鏡面对称で描いたペアの時計も製作されました。その一例である、七宝細密画、真珠、トルコ石で装飾された懐中時計《キューピッドの翼を縛るヴィナス》は1815年頃、ジュネーブで製作されました (Inv. S-133AおよびB)。その他の希少な作品としては、オスマン・トルコ市場向けに製作された豪華な装飾の時計があり、トルコ数字、花模様を多用していることなどが特徴です。

この時代にはまた、機械仕掛けの頂点ともいえるべき《オートマトン》(自動人形) の絢爛たる技術が発展しました。パテック フィリップ・ミュージアムには、本物の生きた絵画のような時計から、羽ばたきながら美しいさえずりを聞かせる《シンギングバード》、小さな人物が腕を動かして時間や分を示すものなど、音楽的な機構をふんだんに盛り込んだものが展示されています。

また1762年にイギリスの時計師トマス・マッジが製作した時計 (Inv. S-1033) は最古の永久カレンダー搭載懐中時計とされており、この時代の技術の進歩にも目覚ましいものがありました。近代的時計製作の先達の中では、偉大なアブラアン・ルイ・ブレゲ (1747～1823年) が傑出しており、ミュージアムは、見事な2点の《同調時計》(Inv. S-970A) など、彼の先駆的な作品をいくつか所蔵しています。またジャン・アントワーヌ・レピーヌ (1720～1814年) は、《レピーヌ・キャリバー》として知られる新しいムーブメント・アーキテクチャーを発明し、時計の厚さを薄くすることに成功しました。その他、初期の自動巻懐中時計などが展示されており、今日、ミュージアムではケースから取り出されたその機構を見ることができます。

18世紀末には奇抜さが流行し、1830年頃までは婦人用時計のデザインもその傾向を反映していました。この時期は《ファンタジー・ウォッチ》と呼ばれる装飾的な時計の全盛期で、ミュージアムもその卓越したコレクションを所蔵しています。これらの時計は、楽器、動物、花、果物など、驚くほど多様なオブジェの形をしており、その多くが色鮮やかな七宝で装飾されています。またペンナイフ、嗅ぎたばこ入れ、女性の身の回り品を入れる小さなケースなど、実用的な小品も豊富に揃っています。また1800年に製作された、指先で時刻を知ることができる《モントル・ア・タクト》(触覚時計) と呼ばれる時計 (Inv. S-1048) など、興味深い品々も展示されています。ケースの円周には12個の宝石が配置されており、その宝石の頭文字を順につなげると《heures d'amour》(愛の時) と読むことができます。

ミュージアム3階のオールド・コレクションは、著名なミニット・リピーターを含むチャイム・ウォッチの発展



《報道資料》 ページ 7

とクロノグラフの誕生を解説する展示で締めくくられています。1820年代にニコラ・マテュー・リユーセックが設計したインク式クロノグラフがいくつか展示されています (Inv. S-965)。そして最後は巻き上げ機構の開発です。とりわけジャン・アドリアン・フィリップの偉大な発明に先立ち、鍵を用いずに巻き上げと時刻合わせを行う時計の開発が次々と行われたのです。

2階

1839年から2000年に至るパテック フィリップ・コレクション

パテック フィリップ・ミュージアム2階フロアでは、1839年から2000年に至るパテック フィリップの作品が展示されています。またそれ以後に創作された記念タイムピースの一部のコレクションも展示されています。懐中時計、ペンダント・ウォッチ、腕時計、小型テーブルクロックなど、約1,150点のタイムピースが20のテーマ別エリアに展示されており、最も独創的な時計メーカーのひとつであるパテック フィリップの全体像を見ることができます (添付のフロアプランを参照)。今日、マニュファクチュール パテック フィリップにとってこの遺産は、豊かなインスピレーションの源となっています。

1839年、ポーランド人の紳士アントワーヌ・ノルベール・ド・パテックとその同胞フランソワ・チャペックが、ジュネーブに時計メーカーを設立しました。当初は主にポーランドへの輸出向けに時計を製作していましたが、それは宗教的または愛国的なモチーフで装飾された時計が多いことからわかります。

1845年、パテックは、若いフランス人時計師のジャン・アドリアン・フィリップと力を合わせることを決心しました。ジャン・アドリアン・フィリップは、リュウズを使って巻き上げと時刻合わせを行う、最初の鍵なし時計を発明した人物でした。この革新的な特許取得のシステムは、瞬く間にすべての時計メーカーによって採用され、今日に至っています。

やがてマニュファクチュールは、製品の技術上、美観上の卓越した品質によって知られるようになりました。懐中時計やペンダント・ウォッチなど、さまざまなモデルがその成功を物語っており、これらには彫金、七宝、ジェム・セッティングなど、多彩な洗練された装飾が施されています。

1851年、パテック フィリップはロンドン大博覧会でゴールド・メダルを受賞しました。ヴィクトリア女王はブルーのペンダント・ウォッチを購入し、七宝とダイヤモンドで装飾された別のモデル (Inv. P-24) にも魅了されました。どちらも今日、ミュージアムに展示されています。多くの王族や貴族は、若いイギリス女王にならい、マニュファクチュールの時計を購入しました。これらの時計には、モノグラムや王室の紋章が入れられることもあり、1910年に製作されたミニット・リピーター搭載の懐中時計《レグラ公》(Inv. P-534) はその著名な一例です。

パテック フィリップは創業以来、精度を重視していました。計時精度の追求は、1873年から1968年まで行われた計時精度コンクールを席卷した、数々の特別設計の時計やムーブメント (中には製品化されなかったものもあります) のいくつかによって跡づけることができます。またミュージアム4階に展示されている、マニュファクチュールが獲得した数多くの賞やメダルも忘れてはなりません。



パテック フィリップは創業当初から、コンプリケーション（時、分、秒以外のすべての機能または表示）の最高の巨匠として知られています。パテック フィリップが1925年に製作した知られる限り最初の永久カレンダー腕時計（Inv. P-72）を含む永久カレンダー、デュアル・タイムゾーン・モデルや著名なワールドタイムを含むトラベル・ウォッチ、そして数多くのミニット・リピーターや、パテック フィリップ最初期のチャイム・ウォッチである、1916年に女性の手首に合わせて製作された5分リピーター搭載腕時計（Inv. P-594）が展示されています。これらに加えてクロノグラフ、特にスプリット秒針クロノグラフを搭載した最初の腕時計（1923年、Inv. P-1505）、ツールビヨン、天文表示、均時差表示、およびこれらの複数の機能をひとつのタイムピースに搭載したグランド・コンプリケーションがあります。

これらの技術的壮挙に加え、パテック フィリップはそのデザインの創造性においても常に卓越しています。ミュージアムでは、《オフィサー》スタイルの初期モデルから、アール・ヌーボー、マニュファクチュールの黄金時代アール・デコに重点を置いた腕時計の美的発展の見事なパノラマを、きわめて広範な作品により展示しています。婦人用時計においても、1868年にある伯爵夫人のために製作されたパテック フィリップによるスイス最初の腕時計（Inv. P-49）から、1970年代のきわめて想像力に富んだ、鮮やかな色彩のジュエリー・ウォッチに至るまで、その重要な役割を跡づけています。

見学にあたっては、パテック フィリップの歴史と時計製作に関するその他の魅力的な側面もご覧いただけます。大型のショーケースには、マニュファクチュールが1872年から1936年まで、ブラジル・リオデジャネイロのゴンドーロ&ラブリオ社のために製作した膨大な種類の懐中時計と腕時計のコレクションが展示されています。

また、20世紀初頭のアメリカの偉大なコレクターたち、とりわけジェームズ・ウォード・パッカー（Inv. P-704）やヘンリー・グレーブス・ジュニア（Inv. P-1497）のために製作された数多くの作品も見ることができます。

パテック フィリップの希少なハンドクラフトへの情熱は、クロワゾネ七宝や七宝細密画で装飾された時計やテーブルクロックの数々により知ることができます。

最近導入されたものとしては、パテック フィリップの現行コレクションを構成する主なタイムピースのオリジナル・モデルを見ることができます。これらはカラトラバ（1932年）、ゴールデン・エリプス（1968年）、ノーチラス（1976年）、アクアノート（1997年）、婦人用タイムピースTwenty~4（1999年）です。

最後のセクションでは、20世紀後半から21世紀初頭にかけて、パテック フィリップが重要な記念日に発表した記念タイムピースにスポットライトが当てられています。これらには、1989年にマニュファクチュールの創業150周年を記念して発表され、25年以上にわたって世界で最も複雑な機械式携帯時計の地位を維持した、33の複雑機能を持つキャリバー 89（Inv. P-1989）や、新しいミレニアムの到来を記念して製作された21の複雑機能を持つスターキャリバー 2000などがあります。

この驚異的なミュージアムの旅は、パテック フィリップの最も複雑な腕時計（5つのストライク・モードを含む20の複雑機能を搭載）であるグランドマスター・チャイムで終わります。このタイムピースは2014年、マニュファクチュール パテック フィリップの創業175周年を記念してリミテッド・エディションとして発表され、現在は現行コレクションのひとつとなっています。